

腹膜透析（PD）から血液透析（HD）への移行患者における在宅療法の

の意義-在宅血液透析（HHD）に関する意識調査を行って-

医療法人衆和会 長崎腎病院

○松本玲子 美佐保恵美 白濱美和 白井美千代 山中真樹子 丸山祐子 原田孝司 船越哲

【背景】

PD 患者数は 2009 年より減少に転じ、2013 年末は全透析患者の 2.9%となっている。一方、HHD 患者数は、総数は少ないものの右肩上がりの増加を遂げている。当院では 2007 年より HHD を導入し、現在までに 4 名の HHD 患者を経験したが、うち 3 名が PD 経験者である。

【目的】

PD 患者の在宅治療に対する意識を調査し HD もしくは HHD 移行への選択における心理や生活背景について検討する。

【対象・方法】

当院で 2007 年から現在まで PD を施行した患者 49 名を対象とし聞き取り調査を実施した。

【結果】

過去 8 年間の累積 49 名の PD 患者のうち、現在も PD を継続している者は 6 名であり、残り 43 名のうち 25 名は死亡、14 名が HD 継続中である。この 14 名に HHD の希望を聞いたところ、希望者は 4 名（平均年齢 55.0 歳、全員有職者）で、理由は仕事の継続であった。非希望者の意識としては、「通院の方が楽」、「そこままでして自宅でやりたくない」、「他の家族に負担をかけたくない」であった。一方、現在 HHD 開始時の平均年齢は 52.3 歳であり全員有職者であった。

【考察】

当院での HHD 患者の治療選択理由としては、在宅医療への思い入れよりもむしろ仕事の利便のためが多く、HHD の意義としては社会復帰が大きいと推察する。